

無 教 會 獨 者 の 友 人

家 庭 宗 教 美 文 の 小 冊 誌

明 治 三 十 四 年 三 月 十 日 第 一 號

每 月 一 回 五 日 發 行

社 説

無 教 會 論

「無教會」と云へば無政府とか虚無黨とか云ふやうで何やら破壊主義の冊子のやうに思はれますが、然し決して爾んなものではありません。「無教會」は教會の無い者の教會であります、即ち家の無い者の合宿所とも云ふべきものであります、即ち心靈上の養育院か孤兒院のやうなものであります。「無教會」の無の字は「ナイ」と訓ひべきものであります。「無にする」とか、「無視する」とか云ふ意味ではありません、金の無い者、親の無い者、家の無い者は皆な可憐な者ではありません乎、さうして世には教會の無い、無牧の羊が多いと思ひますから茲に此小冊子を發刊するに至つたのであります。

世には名は立派で實は穢い者があります、表紙が立派で中の極く詰らない書があります、面が美しくして心の極く醜い婦人があります、外貌が極く優しくして心は鬼のやうな男があります、之に反して名は平凡でも實はエライ人がありますし、表紙は澁紙でも中は金玉を列ねた書があります、奸婦は美人の内にも多く、獐人は多くは美男子であるさうです、物は何んでも名と外形と許りでは分りま

せん、或人が英國有名の學者ドクトル、ジョンソンを評しまして、「彼は皮膚丈けの熊である」と申しました、熊のやうな面をして居り、熊のやうな素振をして居つたドクトル、ジョンソンは英國中に一番優しい人でありました。

「無教會」も丁度そんなものになりたいと欲いませう、壊すやうに見えて實は建てる者、怖いやうに見せて實は愛らしい者、熊の皮を被つて居て小羊の心を有ち、社會に大革命を起す者のやうに見えて實は小女と老人の友となりたいたいと欲います、世に般若の面を被つた者は皆な般若であると思ふものが多くありますから、私共は熊と般若の面を被つて、物の外形に許り注意して居る人共を逐散し、心の中を探る者を引付けて茲に無教會なる大教會を建てやうと欲います、

斯う云ふと何にやら私共も亦野心を懐く者のやうに思ふ人もありませうが、夫れは決して爾うではありません、眞正の教會は實は無教會であります、天國には實は教會なるものはないのであります、「われ城(天國)の中に殿(教會)あるを見ず」と約翰の黙示録に書いてあります、監督とか、執事とか、牧師とか教師とか云ふ者のあるは此世限りの事であり、彼所には洗禮もなければ晩餐式もあり

明治三十四年二月廿七日内務省許可
明治三十四年三月十二日第三種郵便物認可

無

教

會

ません、彼所には教師もなく、弟子もありません。

我れ新しき天と新しき地を見たり、先の天と先の地は既に過ぎさり海も亦有ることなし、我れ聖域なる新しきエルサレム備整ひ神の所を出て天より降るを見る。その状は新婦その新郎を迎ん爲に修飾りたるが如し。「無教會」は斯う云ふ教會を世に紹介せん爲めに働く積りであります。

然し此世に居る間は矢張り此世の教會が必要であります、爾うして或人は人の手を以て作つた教會に參し、其處に神を讚美し、其處に神の教を受けます、或教會は石を以て作られ、或教會は煉瓦を以て作られ、又或教會は木を以て作られます、然し私共何人も出席する教會を有つといふわけではありません、世に無教會信者の多いのは無宿童子の多いのと同じであります、茲に於てか私共無教會信者にも教會の必要が出て来るのであります、此世に於ける私共の教會とは何であつて何處にあるのでありましようか。

神の造られた宇宙であります、天然であります、是れが私共無教會信者の此世に於ける教會であります、其天井は蒼穹であります、其板に星が鑲め

て有ります、其床は青い野であります、その疊は色々の花であります、其樂器は松の木梢であります、其樂人は森の小鳥であります、其高壇は山の高根であります、其説教師は神様御自身であります、是が私共無教會信者の教會であります、羅馬や龍動にあると云ふ如何に立派なる教會堂でも、此私共の大教會には及びません、無教會はれ有教會であります、教會を有たない者のみが實は一番善い教會を有つ者であります。

詩歌

美服を纏ひたればとて誇る

こと勿れ(新約聖書創世記第

華南譯

(一)如何なれば人はむかし祖先の耻辱を蓋はんとて織り成されたる衣服の故を以て誇り傲るや、服装の術は人間の父母エバが罪を犯すの術を學び得る迄は決してあらざりしなり。

(二)エバか初めて衣を纏ひたるの時清淨無垢の服は既に此世を去り了りたるなり、而も其子孫は此失はれたる光榮の悲しむべき徽章を以て空しく誇り傲るなり。

(三)誠や我等は誇りて其衣服を飾り示めす事を好み是れ新たにして美はしと稱す、而かも其極

力誇る所の衣服は嚮に可憐の羊と蠶の纏ひたる古着なる事を識らざるなり。

(四)麝金香と蝶とは我よりも遙に華美なる衣服を装ふなり、我如何に善美を盡して服装すればとて其美は到底蟲と花とに及はざるなり。

(五)既に外装を以て彼等と争ふと能はざれば心の内の美服を求めて以て之に對せざる可らず、智識と美德、眞理と恩寵、これ最美の衣服たるなり矣。

(六)去らば昆蟲は最早我と比較すべきものに非ず、蓋は是れ天の使の纏へる衣にして亦地上に於ける神の子の着給へる最美の服なればなり。

(七)此衣や其色變ることなく古ぶることなし、雨と蠶と微とを恐るゝの要なし、汚るゝの憂なく終始清し、用ゆること彌々多ければ輝くこと愈愈大なり。

(八)嗚呼我は此世に於て此美衣を纏ひ天に到りても尙ほ之を装はむと欲す、神は之を見て必ずや嘉みし給はむ、蓋は是れ聖手の業にして其喜び給ふものなればなり。

所感櫻鳩

交感

余は、今府下の或高等の學校に在學せり。余の目的は少年子弟の教育者たらむとするにあり。余は

明治三十四年三月十二日第三種郵便物認可

昨年の二月、はじめて聖書と云ふものを讀みぬ。今は又聖書之研究を愛讀せり。されども、未だ神を信ぜず。天國をさとらず。聖書も漸く四福音書をよみしにすぎず。さりながら、慥に、余は聖書の感化をうけ、余が人世觀に、一の新なる傾向を生じたり。此後も、余が果して信徒となり得べきか、又吾靈魂の不死を信じ得べきかは、豫知するを得ざれども、余は此聖書の教により、キリストの品格に學び、吾健全なる人世觀をつくり、純潔なる生涯を、此天地の間に送らむ。よしや、余は死後に天國のあるを信ずるとなくとも、人間は、誠實に此世に働きて終るべきを深く信じて、兎に角、此現在に於ては、務めて神の教に従はむことを望む。

過去には悔しきとのみ多し。されど過去は過去に葬らしめて、將來に希望の光を仰ぎ、現在に樂みて、しかも怠らず。今日にまされる明日を求めん。

余は少年時代を徒費しぬ。余をして再び少年たらしめば、余はかゝる生活をなさむと思ふとなきにあらず。余は教育者となる身なれば、多くの少年をして、余が如き失策なからしめむ爲に、余が今理想せるものを以て、此少年を教育せむ。

余に一人の妹あり。彼は熱心なるクリストの信者にて、年こそ余に二歳を劣りたれ。思想の高潔な

るは、余の及ぶ所にあらず。彼は一年間程、東京にありて、看護學を學び、今は國にありて、子女の教育に力を盡せり。彼が時々通信は、彼がいかに、其職に熱心なるかを示すものにして、余をして、實に教訓をよむが如き思わらしむ。今其二三をくりかへさむ。

私看護婦養成上感ぜしは、唯藥の附方のみ教へても、眞の親切の心を起させねば、眞の看護婦と云ふものは出來ず。たとひ出來ても、それは死物の如く、虎を畫きて眼球をかゝぬ様なり。故に看護婦の精神を充分注入すべし。

先の地方にては、殊に熱誠をこめて、働きたれば、愚癡なる生徒も、余程よく出來たり。私出立の際は、雨を冒して、停車場まで見送り來り雨の中にシク／＼一同泣き出したり、私も人情の美なるものを感じ、涙止めあへず、此時は、優美なる神の念が心にみち／＼ぬ。

此度の處は、今まで某婦の講じ來りしを、中途より私が引受けてなすことになりたるなり。前講師はいかなる考にて教へられしにか、生徒共を一覽せしに、講堂にては少しの取締もなく、茶飲會にでも行きし様に、教師の前にて喋舌し、而も學力は少しもつき居らず。又生徒の中に、金満家有力者の婦女が勢力を有せる様な傾あり、これでは地方官に對しても相すまず。又社

會を救助する實もなからむと思ひ、適宜の規律を設け、教授の法もよく考へ、平同に生徒を取扱ひたり。然るに却りて先方の不平を招き、金満家の生徒達は、今までの勢力をそがれて、甚だしく私を惡し様に云ひたりとそ。されど私は、神の道に正して善しと思ひたれば、屈せず自分の職をつくしたり。さるの中には熱心なる生徒もありて、心を打わけて話すものもあり。又先の地方の生徒も、交る／＼尋ね來りて、涙と共に語りて飯るなり。

講習の初の日、一時間文、看護婦の精神につき、又看護婦の必要につき、吾身の上を實例に引きて話したるに、涙を流したる生徒もあれば、あくびをしたる生徒もありぬ。

此地(八女と云ふ所)に來りし日の述懐。

今日よりは八女の嵐に身をさらし

ふかきみとりの松を植なん

立迷ふ麓の雲の晴行きて月すむ峯を見るよしも哉

雲をわけて高峯のおくに尋ね入らむ月のかけすむ

谷もあるやと

實傳

模範的一青年

長崎東山學院 益富政輔
我友堀田君病を以て逝く、嗚呼哀哉、蓋し余が

彼を悼惜する所以のものは單に其同窓生なるを以てに非ず、余は彼が悲惨なる歴史を思想して流涕滂沱たるを得ざるものあればなり、抑彼が本校に來りしは去三十年九月にして爾來今日に至るまで彼は獨立自給の道を立て唯己れの腕と脛とをたより小學業を修めつゝありき、一般の學生を見れば、彼等は己れの學資に不自由を感せざるのみか糸々皆膏血粒々皆辛苦たる父兄の刻苦して得たる金銭が如何に貴重なるやを知らず、思に任せて之を徒費し剩へ種々に口實を設けて過多の金銭を要求し之を酒食の資に投するもの少からざる今日に於ては彼の如きは實に得難きの青年にあらずや、若し夫れ彼の苦學の狀を想像せんか、或は炎熱金を鎔すの時他人の不淨物を洗ふて洗濯業に従事し、或は襪縷の夫人服を着て造船所に使役せられ、或は某商店に人足となりて自ら荷車を挽き、或は三更人静まりて世人は皆鴛鴦衾裡夢暖かなるの時電話交換手となりて平均四時間乃至五時間の勞働に服し、殊に病院に入るの前、數日間は病を推して業を執り床に倒るゝの前夜の如き尙徹夜して勵みたりき、斯して彼は毫も其勞を厭はざりしと雖も如何せん學業の余暇を以てする事なれば時間も勞働も意の如くならず、勞働減すれば報酬從て減すれども而も入る可きの金は之を使はざるべからず、是於彼は飲食を節するの己むを得ざる

に至れり、余は之を彼の死後に聞く、彼は全く二月月の間はパンと味噌とを以て常食とし剩へ時に或は絶食し時に或は生蘿蔔を食ひ水を飲み以て僅かに餌を凌ぎたる事もありしと、嗚呼何ぞ悲惨の極まれるや、然れ共余をして腸を斷たしむるものは茲にあらずして他に存す、何ぞや曰く、彼が斯る悲境に沈淪しつゝ、尙其窮乏の狀を外に露さす恰かも衣食に飽けるか如き面地して他生徒と共に教場に學びつゝありし事是なり、吾人は讀書に耽りて飲食を忘れたる故事を聞く、而も今日の學生中誰か斯の如き篤學の士あらんや、若し夫れ彼にして一縷の希望なからんか、安んぞ自ら求めて此苦學をなすものぞ、若し彼をして安逸を求めしめば彼は家郷にありて少くとも一家の主人公として氣樂に世を渡るを得べかりしと雖も安逸姑息は彼の最も惡む所、故に甘んじて此苦境にありき是豈大丈夫の心膽に非ずや、青年の本領に非ずや、嗚呼彼は實に當世の好青年なりき、然れ共如何せん肉に屬ける彼の希望は肉躰と共に一遍の烟となり丁んぬ、悲哉、されど生命に付ては我等之を議するの權なし、唯此權を有する者は彼に生命と肉躰とを與へ給ひし神あるのみ「我儕の中己の爲に生き己の爲に死る者なし蓋我儕生るも主(神)の爲に生き死ぬるも主の爲に死ぬ此故に或は生き或は死るも我等は皆主のもの也(羅馬書十四章七、

八節)若し夫れ彼にして神を知らず、彼の希望にして唯地に屬けるものゝみなりせば、如何に不幸ならずや、然るに彼は眠らんとする臨終の際にも我は神と共にあり、神亦我と共に在ます事を信じ、毫も思ひ煩ふ事なく、重き枕の中にても天の彼方に光明を認め、安全として眠に就きぬ、嗚呼彼も亦幸なる哉、余は茲に彼の死を悲しむと共に亦他方に於て神の慈愛を感謝せざる可からず、

雜感

感餘錄

一、貧の快樂 石川 默羊

余にして多くの財を有せんか、多く散すべき義務あり、之れか爲には、無益なる輩は群り來らん、余にして彼等の望む處を遂げしめざらんか、彼等は之れに報ゆるに誹謗を以てせん、而して余が得る處は煩勞と不快のみ、然るに余やこの憂なし、

二、彼と我

彼と我と相對する時も、彼と他人と我と共なる時も、彼と我と境遇を異にせる時も、彼と我と處を同ふせざる時も、何時も變らざる彼は基督耶穌のみ、

三、評判

世に評判なるもの重んずべしとせば、妄に人事を言ふ事は出來べきものにあらず、世の批評する處

數ふるに足らずとせば、人事を言ふも差支なかるべし、然るに評判を重んずる人は、妄に憶説を醸して人を傷け、區々たる世評を顧みずと唱ふる人は自からは小心翼翼たり、咄何等の矛盾ぞ。

四、有力なる沈黙

畏懼の爲に非ず、輕蔑の爲に非ず、果又憤怒の爲にも非ずして、語るべき辯舌と述ぶるべき思想を有しなから、黙すべき時に黙するは、有力なる沈黙なり。

五、感謝

愛に富み、情深き、兄弟に接して、懇切なる待遇に預からんか、余は彼等によりて與へられたる神の恵を感謝せん、冷淡頑固なる人に遇ひて、余は冷遇されんか、昔使徒等かキリストの名の爲に辱しめを受くるに足る者と爲られしを喜びし如くに神の恵を感謝せん、余やかゝる經驗を得るに至れるは、神の大なる恵と深く感謝する處なり。

通信

角筈だより 角筈生

○別に變つた事はありませぬ、一同至て丈夫であります、幸にして流行感冒にも罹らず、聖書と天然と歴史の研究に毎日愉快に暮して居ります、○日曜日には午前十時より聖書の講義がありませぬ、家族の者の外に近所の友人が來られまして此

頃は中々賑やかなる集合となりました、猶だ二十人位ひ參られても家は狭くはありませぬから有志の方には御出なさつても宜う御座います。

○午後は大抵散步を致します、梅は咲き出し、萼木瓜の類は徐々花の用意を始め、何んぞなく心が浮き立ちます、遠からずして又森の樹芽に復活論の實證を見ることが出来るやうになるのであります。

○二週間に一度づゝ、東京の市に降ります、降て塵埃を浴び、汚氣を吸ひます、實に心悪しく感じます、西洋の諺に「人は市を作り神は村を造り給へり」と云ふ事がありますが、私共村に住つて居る者は實に此語の真理なるを感じます。

○毎朝起きて讚美歌を頌ふ代りにオルツオスの詩を一頁づゝ讀みます、之は心を静めるための一番善ひ方法であります、「無教會」の紙面に於て度々彼の小編を讀者に紹介致したく思ひます。

○去月廿六日には友人嚴本善治氏の主たる、明治女學校に於て演説を致しました、久振りの女生徒へ對しての演説でありまして、甚た心嬉しく感しました。其内生徒方より提出されました。題の中に「日本地理と日本人の氣質」と云ふのがありました、之に對する私の答辯に就ても他日本誌に於て讀者諸君に語りたく思ひます。

○何にしる人生は愉快なものであります、一日は

是れ短い一生涯であります、私共各自に一年間に三百六十五回の新生涯があると思へば何んと愉快ではありませぬか、私は毎朝太陽の面を見る毎に嬉しくて堪りませぬサヨナラ。

名古屋だより 製造生

予は敢て盲拜阿諛を呈するものに非ず、去れ共、左の數言を足下に寄せんと欲す、世に義人あり昨の義人は偽人なりきと嘗り以て自ら高清を誇りて得たりと爲すものあり、然れ共、若し惡しき樹は惡しき實を結び、善き樹は善き實を結ぶものなりとの聖句をして真理ならしめば、余は寧ろ曰はんと欲す、義人何かある、偽人何かある、唯善き實を結ぶ樹に信を繋ぎ取りて以て我が田畑に移し培はんと、左の腰折れは近頃の述懐に御座候我類を熱き滴のつたふなり幸かあらぬか知る神とわれど、

十字架の神一はしら母ひとり何は措きてもつかさざらめや
足下の嫌厭せらるゝ○○○○の家人自ら省みて
赫然たりと雖も亦自ら心中歡喜の狀を告げざるを
好まず此の數言先生の目に觸れんを期して敢て致すものなり

無

教

會

祝

詞

拜啓

天恵の下に愈御多祥慶賀此事に御座候、小生は舊「獨立雜誌」以來引續き「聖書の研究」を嗜讀致居候て常に御高示を蒙りつゝ有之候處、今回又更に宗教雜誌「無教會」を創刊被致候趣、先生が愈々多々報恩的好舉に出で信者未信者の宗教的智識啓發、後進の誘導に努められ候は實に敬服感謝の至りに候、這度の新雜誌は無教會者を目的として御發行相成由に候得其所屬の教會を有するものにも頗る有益なるを信じ候、蓋は今日の大方の講壇は眠れるか如く、的外れの生氣なき説教に非ざれば社會問題の論究にのみ忙はしくして、直接に信者の心靈に肉薄突貫するもの至て少く、事實無教會に異ならざるの狀態に有之候へば、故に小生は何卒本誌が其の姉妹雜誌たる「聖書の研究」と共に眞理の爲め益々健全に發達成長して成功せんことを切に祈り候ま、茲に御祝詞申上候早々不宣。

二月二十三日夜 奈良 住野 良三
内村 先生 貴下

夜

話

信者の生涯

内村 鑑三

キリストを信じない人の眼から見ましたならば。

私共信者の生涯はさぞ詰らないものゝやうに見えましよう、芝居の快樂もなく、小説の快樂もなく、酒や煙草は藥として用ゆる外は用ひず、世の功名心なるものは全く跡を絶ち、世に譽められたくもなければ譏らるゝも左程苦痛を感せず、只日祈禱と聖書の研究と神の命し給ひし勞働との他に爲すことのないのは實に單調無味の生涯の様に見えましよう、

然し亦私共信徒の眼から見ますと世の人の生涯は實に推察の至りであります、僅々五十年の生涯を希望の極と定め、苦勞があれば之を慰めるに唯酒と名譽とがある許りで、少しの事に憤り、人の成功を羨み、妻は夫を猜み、夫は妻を信せず、父子相争ひ兄弟相疑ひ、世の變遷と共に移り行く生涯は實に氣の毒千萬の生涯ではありません乎、私共は何にも私共許りが神に恵まれて宇宙の眞理を有つ者であるとは思ひません、然し私共キリストの教を信じましてより世の人の云ふ快樂とか名譽とか云ふものは實に夢のやうなものであつて、空の空、虚の虚であることを知るに至つたのであります。爾して私共信者の生涯は決して詰らないもの

ではありません、私共キリスト信者は決して隱遁者の類ではありません、隱遁者でない許りではなく、私共はキリストを信するに依て始めて世に出たと云ふても宜しい程であります、生涯が全く

の快樂となりますのはキリストを信して後の事であります、世の人は天然の美を樂むと申しますが然し決して私共が樂しむやうには樂むまいと思ひます、私共は花が美しいとか、月が清らかだとか云ふて天然を樂しむのではありません、私共は神様の家と思ふて此世界が暮はしくなるのであります、又私共はキリストを信するに依て始めて人を愛するとは何う云ふ事であるか、解りました、人てふものはキリストを信するに依て愛らしき者となりました、敵を敬するとか愛するとか云ふことは決してキリストを信じない人の爲る事ではありません、夫れでありますから私はキリスト信者となりましたことを決して後悔致しません。

丹波だより

余は人に師と呼ばれて誇る者にあらず、否な余は人に師と呼はるゝの價値なき者なり、然れども此寂しき社會に在て我が此愛する日本國に亦數多の同志あるを知つて大に心強く感するものなり、志賀眞太郎君は丹波の人、今日まで既に二回、三百餘里の山河を遠しとせずして態々余を角筈の居寓に訪はれたる仁なり、今茲に此愛友あるを他の誌友に告げ、以て諸氏と共に君の如き篤實の士を偕とせんことを欲す、記者誌す愛敬する吾師内村先生、不本意にも久瀾に相過申

候御海怒被下度候、師によりて生れしオチシモなる小子忘れたるときは無之候得共只々不文なる幾度か筆を手にしては情思の万一を述ふる能はず空しく抛ちて今日に及び候次第に御座候、聖書の研究萬朝紙上に於ては常に高教に接し昨夏共に採影申候寫眞に對しては尊貌を視膝下にあるの思ひを致し申候、希くは主に於ける恩寵と平和師と師の一家の上に彌増さんことを切に祈り申上候、小子幸にして、無恙、主の恩惠の下に消光仕居候、未だ信仰弱くして朝に改め夕に悔ゆるの情態、語るべきの進歩なく志し事と違ふこと多して自ら願て耻入候次第に御座候、乍然失望の内にも希望と安慰の恵み加りて何時かは救はるゝ時あらんと感謝と祈禱罷り在候、奈良私立中學校廢校の事新聞紙上にて見當り申候、尊敬する吾大島正健先生は如何被爲候哉御住所承り申度候、小子遠隔の地にあり且か弱くして師及び同志先輩諸氏の事業を助くるの福に與るを得ず候も此の國と人との救はれて神の榮光の顯はれんこと小子終世の望に有之候、師の事業の成效の爲絶へず祈禱しつゝある一小羊の丹波の僻地にあることを憶ひ被下候は、幸甚、先日御發行の雜誌上又無教會なる雜誌御發行の事承り申候別紙郵券三十錢封入置候に付乍御手数恐縮御受領の上該紙御送付被下度奉願候、不文欠禮御高恕奉願候

敬具

明治三十四年三月十二日第三種郵便物認可

明治三十四年三月五日 志賀真太郎

内村鑑三先生 侍史

雜報

札幌獨立教會 當分洗禮晚餐式中止すとの報導あり余輩は素より形式を卑んて實質を尊ぶもの、今日の教會にして往々會員の増敷を努めて毫も其實質如何を問はざるものあり、同教會にして果して此意に出でしとならば余輩は遙かに是れが斷行を賀するものなり。

信州上田獨立苦樂部 是れ同地少壯の士を以て組織せる團體なり、部員少數なりと雖も各自主義の集合なれば是れが永遠に持續を計らば亦以て活動するの時あるを疑はざるべし、毎月一回有益なる集合ありと、余輩は信す、現今の日本必ずかくの如き會合を要するを、望むらくは諸士健全以て冥々の間衆與の儀表とならんことを。

東京獨立苦樂部 是れは本社内に設立せる家庭的團體なり、前者の母體とも謂つべきか、必ずしも活動の團體にあらざるも其間自ら一道の軌轍あり、今回部員三十名を限とし尙入會を望むものは書面或は部員の照會を以てせば入會を許すとあるべし、毎月第二日曜日を以て會合の機とす、尙從來本社の事務に従事せる岡村誠之氏は今回學事專勉の爲再び都下に移住せられ嘗て浦和に在りし佐藤武雄氏來て其後に投せり此外會計專務として山岸壬五氏あり俱に牛進的態度を取て徐々として進行し、あり、故に本社を一名牛進社と號せり

讀者諸君に告ぐ

「無教會」は本誌并に「聖書之研究」讀者の交通機關なり、故に讀者は何人も其

廣告

紙面に投書するの特權を有す、但し余なり長言を避くべし、地方の狀態甚たり可なり、且つ心中の憂愁を訴へよ、或は讀者中之を癒すを得る者あらん、願くは其紙面をして實物的教會たらしめんことを、
主筆白す

聖書研究に必用なる書籍

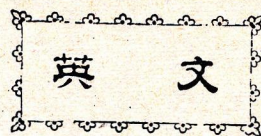
- ヘボン氏 聖書辭典 定價一圓廿錢
- デホレ氏 聖書地名 定價一圓
- スト氏 聖書類聚 定價四錢
- 上田氏 聖書類聚 定價四錢
- 編纂 聖書類聚 定價四錢
- 横井氏 天啓教と聖書 定價二圓
- 村上氏 聖書衍義 定價十五錢
- 星野氏 聖語一覽 定價十五錢
- 松尾氏 活る基督と四福音 定價四錢
- ラトニ氏 新約全書註釋(十五冊) 定價九圓九十錢
- トニ氏 新約全書註釋 定價八錢
- トニ氏 新約全書註釋 定價八錢
- 携帶 英文馬太傳註釋 定價一圓
- ツボト 馬可講義 定價一圓
- 調點 四福音註釋 定價一圓五十錢
- 田村氏 著 四福音註釋 定價一圓五十錢
- 右の外數種あり二錢切手御送附次第目錄呈す

發兌 取次 東京女學堂 聖書研究社 東京四ツ谷角筈 聖書研究社

「聖書之研究」は第壹號より取揃へ御注文に應ず

聖書研究社

明治三十四年二月廿七日內務省許可
三月十二日第三種郵便物認可



(『聖書の研究』第五號より續く)

KEEPSAKE

II.

July 25. 1893.

My dear K.

I intended to write to you before this, but with various things to do I have been rather short of writing time.

I only write now to tell you that we sympathize with you very much in your anxiety for your mother, and we pray to GOD that He will comfort you. From your last post card we concluded that you were not expecting her to recover.

If it is GOD's will to call her away now may the Holy Spirit strengthen her to entrust herself fully to Jesus who passed through death to a glorious Resurrection. Death cannot separate us from Him; and though we know so little about the state beyond death, we have His promises that He will raise up those that believe in Him to everlasting life; and whether we live or die we are His, and GOD will bring us again with Jesus at His appearing.

We quite miss you from Arima this year: We think Arima more beautiful than ever and the weather is splendid.

Now I must go with this to the post. Wishing you GOD's blessing and special help in your trial.

Your sincere friend.

H. Mc. C. E. P.

紀 念 物

(第 二)

廿六年七月廿五日

愛する K.

是より前に書面差上べくの處種々用事有之候爲染筆の餘暇を不得失禮仕候

拙者は茲に御尊母に對する御心痛に同情を表し候神様が貴君を慰め給はらん事を祈り申候事のみ申上度候最近の御端書に依れば御尊母御快復六ヶ敷き様推度致候

若し今御尊母を此世より御召しなさるゝ事神様の聖旨に有之候得者願くは聖靈なる神様の之を助け強めて死より光榮ある復活に遷り被成候キリストに全く其身を委ねらるゝ様祈り申候死は到底我等をキリストより離さしむる事出来不申候又縱令死後の状態に就ては我等の知る事甚だ少なく有之候得共キリストは之を信ずる所の者を窮りなき生命に蘇生せしむるの御約束を有し居候而して我等活くるも死するも俱にキリストの屬にして其再來の時神様はキリストと偕に再び蘇生せしめ被下べく候

本年は當有馬に貴君の御出で被成ざるを誠に物足らぬ様存候有馬は先年よりは餘程美はしき様覺へ且天氣は實に此上もなく宜敷候

是より此狀を以て郵便局へ馳せ可申候御心痛の時に際し神様の御恩寵と特別なる御助を祈りつゝ、貴君の眞友 H. Mc. C. E. P.

無教會概則

毎月一回五日發行、○正價、一枚三錢、十二枚前金三拾錢、郵券代用不苦、但五厘又は一錢切手に限る、

前 金

前金にあらざれば一切發送せず。前金盡きたるときは帶封に記載すべし。

爲 替

郵便小爲替には拂渡局欄内に内藤新地と共ニ聖書研究所、記入せらるべし。

領 收 證

送金に對しては別に領收證を出さず、雜誌の到着を以て前金受領済と承知せらるべし。但領收證入用の方は別に郵券若くはハガキを送られた

住 所 及 姓 名

住所姓名は楷書にて明瞭に認めらるべし。又轉居の節は必ず新舊兩住所とも通知せらるべし。

明治卅四年三月十二日印刷
明治卅四年三月十四日發行

編輯人 内 村 鑑 三
東京府豊多摩郡淀橋町大字角筈百一番地

發行人 山 岸 壬 五
東京府豊多摩郡淀橋町角筈百一番地

發 行 所 聖 書 研 究 社
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 秀 英 舍 工 場